

周辺からの記憶 40

2021年度 むつ

村本邦子（立命館大学）

7月はオーストラリアに行った。ユネスコ世界遺産にも登録されている世界最大級の一枚岩ウルル（エアーズロック）の体験は際立っていた。1万年以上前から先住民がこのあたりに住んでいて、ウルルはその聖地だった。1985年の土地返還以降、99年の契約でオーストラリア政府が土地を借り、先住民8人（女性4人と男性4人）と白人4人で運営委員会を構成してこの国立公園の運営にあっている。オーストラリアでも珍しく協力がうまくいっている例らしい。何冊か本を買ったが、『私はウルル』というファミリー・ライフストーリーがとても面白く、先住民の歴史が生き生きと描かれていた。絵本も魅力的で、ウルルの人たちのシンプルで大切な教えが書かれている。「大地と自然と精霊たち、すべてと繋がっていれば、迷うこともなくひとりぼっちになることもない。私たちは土地の一部であり、土地は私たちの一部である」という言葉には感銘を受けた。孤独を感じるのは、自分自身が自分を取り巻く自然に閉ざしているからだ。キャンベラやメルボルンで、戦争博物館はじめ、いくつもの博物館を訪れたが、戦争や先住民支配の歴史との向き合い方、多様な移民からなっているからこそそのアイデンティティ形成など新鮮だった。オーストラリアは何度も訪れているが、ようやく全体像がつかめ始めてきた感じである。

8月はネパールに行った。南アジアは初めてで、たくさんのおもしろい経験をしたが、まだ十分に消化しきれていない。ここもヒマラヤがポイントだと感じる。飛行機から美しい山々を見たが、雨季でトレッキングは断念した。次は是非乾期に行ってみたいものだ。海もそうだが、山というのも人々の存在に絶大な影響力を持つことを実感する。

ありがたいサバティカル。こんなに自由に動けるのも人生最後のチャンスかもという気がして、精神的に動いているが、それなりに人としての視点が大きく拡げてくれているような気がしている。



2021年度 むつ最終年の取り組み

最終年となる今年こそ現地に行きたいと思っていたが、プロジェクト開催時、コロナ禍は改善せず、むつ市ではコロナの予防接種のために9月まで全てのイベントを中止し、市の職員の方もコロナ対策に専念する方針になったため、残念ながら、またもやオンライン開催となった。

漫画展に関しては、8月6日(金)からむつ市立図書館で予定どおり現地で開催してもらったが、29日(日)までの予定だったところが、公共施設の閉鎖により25日(水)までとなった。感染状況が落ち着けば、秋に現地フィールドワークを実施しようと考え、様子を見ていた。10月15日(金)から17日(日)、下北のフィールドワークを実施することができた。併せて紹介する。災禍における制約と変化する状況の中で、柔軟に工夫を凝らしてできることをするという心構えを身につけることは、本プロジェクトの大きな成果であろう。

2021年度むつプロジェクト@ZOOM

8月27日 14時30分～16時 支援者支援セミナー座談会「家族の笑顔を支えるむつのか～東日本家族応援プロジェクトの十年を紡ぐ」

院生たちが頑張ってくれ、何度も集まって事前準備しながら、タイトルや進行を考え、座談会部分の司会もしてくれた。座談会には、むつ市児童相談所から眞手課長と桜

庭さん、そして今年からOGとなったが、初年度からずっとプロジェクトを支えてくれた杉浦さんが、立命館からは中村さんと私が参加し、これまでの成果を振り返り、後半では今後の可能性に向けて議論した。

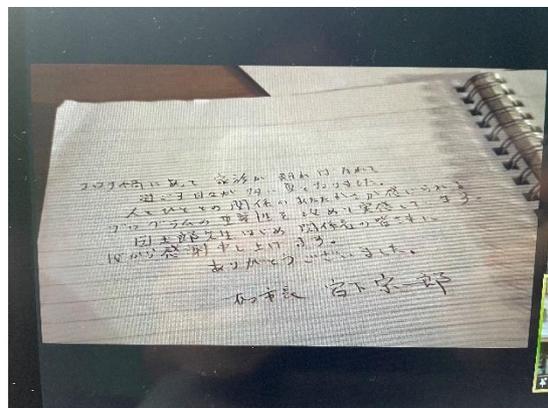
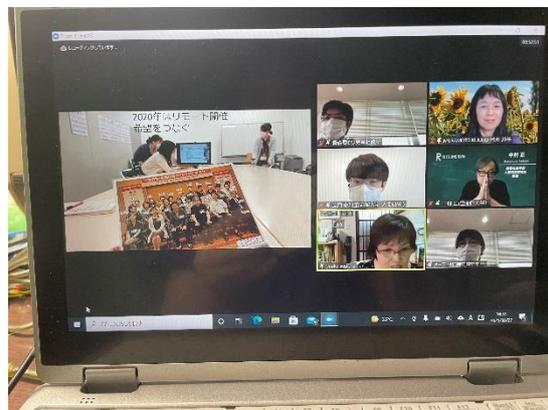
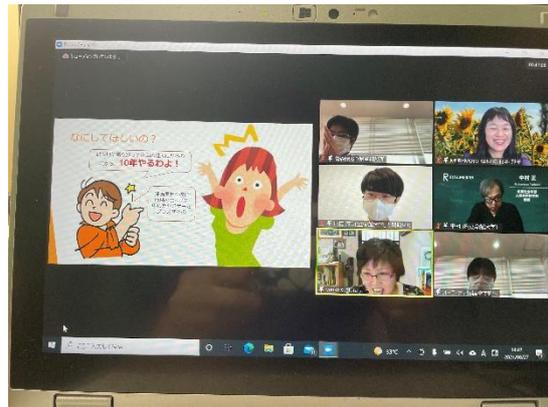
杉浦さんがプロジェクトの始まりから、経過までをパワーポイントにまとめてくれ、コンパクトに十年を振り返ることができた。最初は、児童相談所と立命館の企画だったものを、地域の力を引き出すためのプロジェクトだからと、各機関に連携を呼びかけ、2年目からは実行委員会を設けて続けてきたご苦労とともに、毎回、プロジェクトの確かな手ごたえがあり、それぞれの機関が、このプロジェクトを自分の事業であると位置づけて現在に至ることを語ってくれた。「立命館と見相だけではなく、地域を巻き込んでこのプロジェクトを進めるのにもものすごく馬力が必要だった。それを10年やってきた結果がここにある」「結果として、むつ市は我がものとしてこの支援者支援セミナーを喜んでくれ、市が事業を続けていきたいと言っている」ということである。

むつで生まれ育ったという眞手課長は、むつに興味を持ってもらったことが嬉しかったこと、家族に興味を持って家族のことを考えること自体が支援なのだと言われ、繰り返して言っておられた。支援者の思いを先行させるのではなく、あくまでも家族主体の支援ができるよう研修を続けていきたいとのこと、若手の桜庭さんも、セミナーがそんなトレーニングの場になるのではないかと言っておられた。支援者主体ではなく、当事者主体、家族主体という発想の転換、肯定的関心を向けることから始まる支援は、支援者支援セミナーを通じて共に学んできたこと

であり、これも大きな成果のひとつと言えるだろう。

院生たちは、そこに継続の力を読み取り、現地の方々が苦労もありながら、地域の問題解決力をいかに高めるかに焦点を当てながら、このプロジェクトを大切に思い育ててくださったことに感銘を受けていた。

むつ市連合PTA、図書館、公民館、むつ市子育て支援課などからもメッセージがあり、プロジェクト終了後の新たな展開への期待が寄せられた。後半では、今後の課題や可能性についても議論し、このプロジェクトはこれからも育っていくに違いないという手ごたえを残した。今後の展開が楽しみだし、地域が地域の力に気づき、パワーアップしていくプロセスに学び、このような動きがあちこちに広がっていくことを願う。

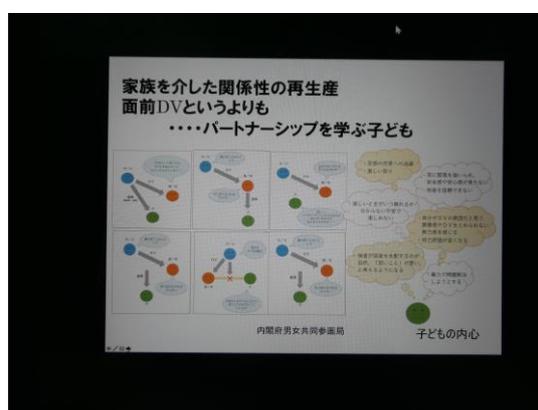
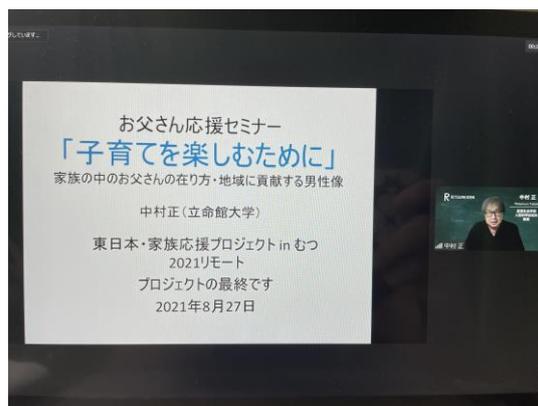


8月27日(金)18:30~20:00 お父さん 応援セミナー「子育てを楽しむために-家族 の中のお父さんのあり方・地域に貢献する 男性像」

例年は男性限定のグループワークとして
いる企画だったが、最終年度はオンライン
となったこともあり、オープン参加の講演
となった。常連だけでなく初参加者、むつ市
以外からの参加者もあり、計34名、新たな
広がりを感じさせてくれた。

例年、「男性のコミュニケーション力」の
実習を行ってきたが、今回の講演では、この
背景と経過、中村さんが取り組んでいる「男
親塾」(大阪で取り組む虐待する父親向けの
プログラム)、またプライベートな家族・育
児体験についても話があった。さまざまな
事例やエピソードを通じて、ジェンダーが
いかに大きく影響しているかがわかりやす
く伝わったと思う。

最後には、過去十年のお父さんセミナー
の思い出話も語られ、セミナーの間、子ど
もたちが調理室でパンを焼いていた時のこ
となど、その光景が目には浮かび懐かしくな
った。伝統的な地域でジェンダー問題をテ
ーマにするのは必ずしも容易ではなかった
側面があることを知っているが、これもむ
つの今後につながっていけばと願う。



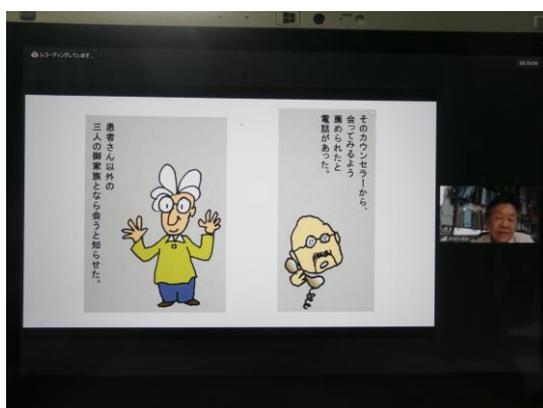
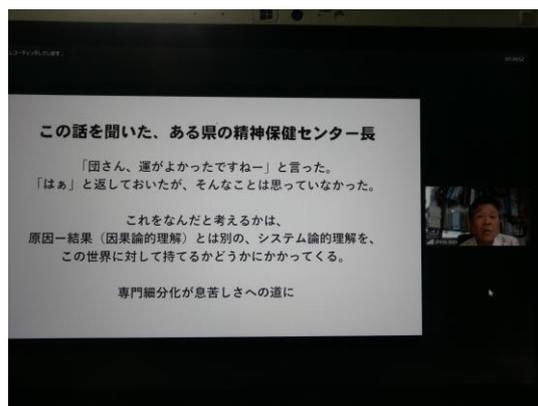
男性のコミュニケーション力

- ① レポート・トークとラポート・トーク
- ② 「I」メッセージと「You」メッセージ
- ③ 後出し負けじゃんけん(勝つことに慣れている)
- ④ 沈黙とおしゃべりの肩もみ練習
- ⑤ 自分の親父の思い出トーク(同じこととする?)
- ⑥ コミュニケーションワーク(聞いてる?他己紹介)
- ⑦ 男はつらいよ体験トーク(弱い部分もある)
- ⑧ 自分のために花を買ったことありますか?
- ⑨ 男性の友人は?何を話す?……

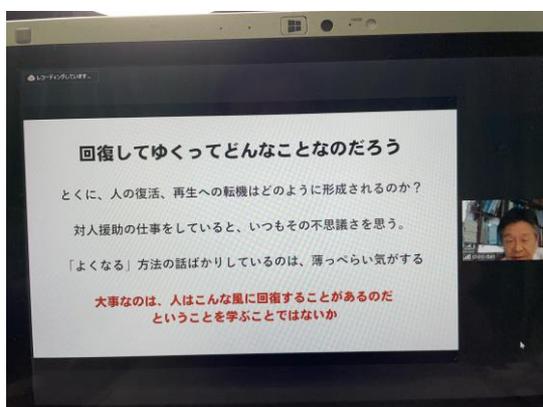


8月28日(土)10:30~12:00 団士郎漫画トーク

漫画トークでは、いつものように具体的な家族の物語を通じて、さまざまに思いをめぐらす内容だった。例えば、本プロジェクトのアイデアの源となったむつ市立図書館のギャラリーがあり、そこで毎年漫画展とトークを行い、これから先も地元の方々の力で漫画展は続いていく。私たちにとっても、地域と関わるという濃密な経験となった。トークの途中には含まれるバズトークタイムは、院生たちが現地の方々と交流する貴重な機会となり、現地には行けなかったが、ほんの少し現地感を味わった時間だったと思う。



その後、12:30~13:30、スタッフメンバーで振り返りの時間を持って最終プロジェクトのプログラムを終えた。



下北フィールドワーク

コロナ禍の様子を見守っていたが、何とかフィールドワークに行けるだろうということで、10月15日(金)から17日(日)、院生たちを下北に連れて行くことができた。六ヶ所村からむつ、恐山、大間と自分たちで回る計画を立てていたが、プロジェクトの始まりからずっと中心にお世話くださっていた杉浦裕子さんご夫妻が、キャンピングカーで案内してくださることになった。院生3人と中村さん、私の5人で参加した。



10月15日(金)1日目

JRで七戸十和田駅まで向い、そこで杉浦さん夫妻と合流、道の駅で昼食を食べてから六ヶ所村へ。私は何度も行っているが、院生たちには是非、六ヶ所村の様子とともに原燃PRセンターを見せたいと思っていた。PRセンターでは、杉浦さんがガイドの予約をしてくれていて、初めてガイドツアーに参加した。限られた時間でガイドされる内容は、自分自身で見て回るのとはまた少し違って、核燃料の再利用がどれほど合

理的で良いものかということが強調されているようだった。





それから日が落ちる前にと、尻屋岬まで車を走らせ、灯台と寒立馬を見せてもらった。下北には十年通ってきたが、尻屋岬まで来るのは私も初めてだった。いつもポスターで見ていた寒立馬と会い、その愛らしい姿と優しい振舞いに、またひとつ下北の新たな魅力が加わった。



夜は、むつの「なんこう」で、むつ市児童相談所の眞手課長と PTA 連合の大見会長を交えた交流会を持った。むつでのプロジェクトは今年で最終となるが、現地では、このプロジェクトを今後も継続して開催して下さる予定で、その打ち合わせも兼ねた会食だった。こんなふうに暖かい関係が築き上げられてきたことは本当にありがたい。その夜は、定宿のむつグランドホテルに宿泊した。

10月16日(土)2日目

朝、7時半にロビー集合して恐山へ。何度も来たところではあるが、今回、あらためて地形が変わっているを感じた。台風や大雨などで容易く地形が変わるのだろう。宇曽利湖の色が硫黄でこんなに黄色く染まっているのを見たのも初めてで、時期や気候によっても変わるのかもしれない。この湖は何か人を引き込んで離さないパワーを感じさせる。それにしても、恐山の正面に見える釜臥山のガメラレーダーは、土地にそぐわず、何とも興ざめな感じがする。





それから、台風の影響で予定していた道路が遮断されており、経路変更して川内ダムへ。川内川は昔から氾濫を繰り返し、大きな被害をもたらしていたが、水源としてダム建設が決まり、1981年、36戸が全戸移転、20年の歳月を経て、1993年竣工となったという。



ダム湖にかかった橋に並ぶ当時の地元小中学生によるリリーフがとても面白かった。複数の学校はすでに廃校となっている。1992年の作品だが、学校ごとに工夫がこらされ、大きくなったら「パチンコやになるぞ」「老人ホームで働きたい」「お父さんの工場で働く」「悪人を注意する婦人警官になりたい」など、将来の夢が書かれ、この子どもたちは今頃どうしてるのかなと想像を巡らせた。



その後、佐井村にある三上剛太郎の生家に案内してもらった。三上家は代々医者の家系で、剛太郎も、新聞記者を経て村医となった。1905年の日露戦争で軍医として従事し、満州に野戦病院を設営して治療にあたっていたが、攻撃の危機に曝された時、ジュネーブ条約を思い出し、手縫いの赤十字旗を掲げて、敵味方なく多くの負傷兵の命を救ったという。

ジュネーブ条約とは、1864年に締結された戦時国際法で、傷病者及び捕虜の待遇改善のための国際条約である。日本では戊辰戦争で榎本武揚らが1868年に箱館に樹立した政権が野戦病院で敵味方の区別を行わずに治療を行い捕虜を保護する方針をとっていたという。これは諸外国から信頼を得るため、榎本らが西欧的な方法を重視したことも背景にあるといわれ、「日本最初の赤十字活動」と称されている。

日本は1886年に最初のジュネーブ条約に加入している。第二次世界大戦時、日本軍の捕虜収容所のサバイバーたちが、日本は捕虜を大事に扱うことで有名だったので、初め日本軍の捕虜になったことで安堵したというような証言をしていることを知っている。第一次世界大戦時の広島や徳島の捕虜収容所の話は有名で、徳島にある坂東俘虜収容所の説明には、その理由を、所長が戊辰戦争に敗れた会津藩士の子として屈辱と悲しみを知っていたからだと書かれていた。こういった精神が途絶え、第二次世界大戦では捕虜たちが非人道的扱いを受けたこと（結局のところ、それは、自国軍の兵士たちの扱いの延長線上にありわけだ）はとても残念である。

三上は、退役後、村に帰り、村医と

して地域医療に勤め、生涯勉強であると、晩年はフランス語を独学し、90才にて『レ・ミゼラブル』を原語で読んだ。1963年、ジュネーブで開催された赤十字の百周年記念イベントでは、赤十字の心としてこの時の旗が展示された。初めて知る話だったが、下北の小さな村に立派な人がいたのだと感銘を受けた。



次は大間のあさこハウスへ。監視のいるわかりにくい入口から、有刺鉄線にはさまれた細い道を走り、建設中の大間原発の建屋が見えるメルヘンチックな庭と家である。厚子さんは、相変わらず笑顔で暖かく私たちを迎えてくれた。



それから、大間崎まで車を走らせ、北通り総合文化センター「ウィング」に立ち寄ると、一階の展示スペースにも原発関連施設の説明があった。



たまたまトイレ休憩に立ち寄っただけだったが、後で調べてみると、HPには、この施設は、下北郡北通りの三ヶ町村（大間町、風間浦村、佐井村）の人々を対象とした「文化・教育・健康および原子力に係る知識向上」を目指す複合型文化施設であると書いてあった。貸会場・ホールの他に、温水プール、図書館、屋内運動場などもあり、町村民が使用できるようである。

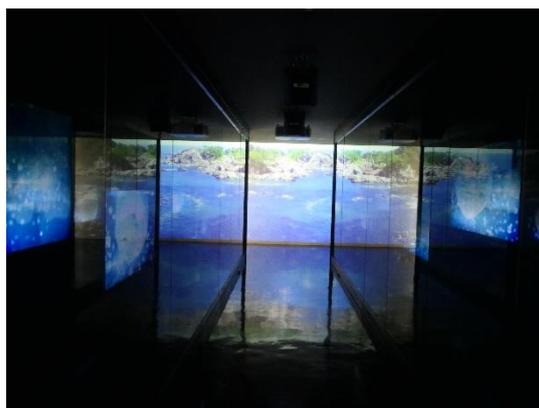


それから遠い道のりを車で走り、すっかり夜になってから八戸まで戻った。宿の近くの「みろく横丁」で夕飯を食べた。

それから、津波伝承館（みなと体験学習館）を訪れた。八戸も津波常襲地であり、今回の震災でも結構な被害を受けていた。八戸に住んでいた杉浦さんから、過去の津波についてもお話を伺った。

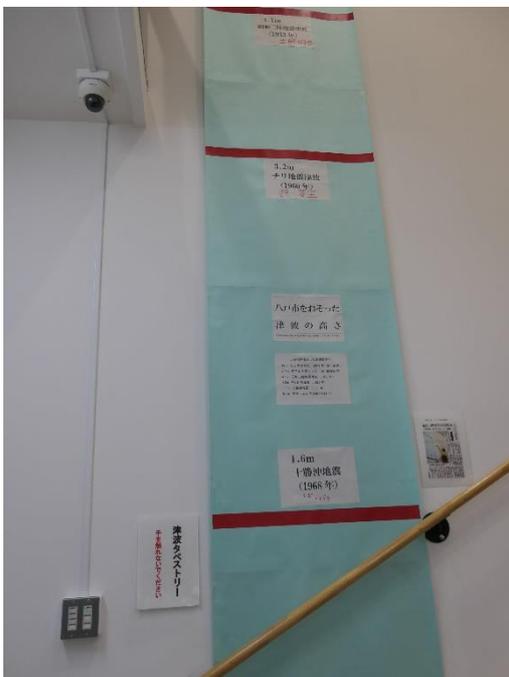
10月17日(日)3日目

朝は早起きして、かの有名な館鼻岸壁朝市に行ってみた。コロナ禍の影響だろう、聞きしに及んでいたほどではなかったが、それでも大勢の人々が朝早くから集まり、にぎわっていた。





その後、蕪島神社、種差海岸、是川縄文館、まで案内して頂いた。八戸は初めてだったが、車の中で、八戸で育ったという杉浦さんの昔の話や被災当時の話を聞かせてもらったことで、イメージも膨らみ、院生共々貴重な体験となった。





市場でたくさんのおみやげを買い、八戸からまた長い旅路についた。



フィールドワークを終えて

今回の旅で院生たちが受け取ったものは大きかったことだろう。院生たちのレポートを一部紹介したい。

まずは、臨床心理学領域 M1 の原口泰知さんである。恐山とレーダーの不自然について。「本州の最果て下北半島で、周辺人たる私たちが待ち受けていたのは、不自然な自然だった。それは、私が持つどんな言葉をも跳ね除ける重量で立ちはだかった。その感覚はある意味で認知的不協和、またある意味でダブルバインドだった。矛盾の真っ只中で無防備だった私には、どこか遠くの映画のワンシーンを観ているようにすら思えた。あるいは、一旦そう思っておく他になかったのだろう。そうでなければ自己の揺らぎに耐えきれなくなってしまうからだ。だが、これはファンタジーなどではなく、確かにそこに在る現実なのだ。言い換えるなら、私が感じたのは圧倒的な無力感だっ



た。・・・そんな無力の果てで、際立つものがあつた。ひとつは、人間によるどんな思惑にも、開発にも、狼狽にも、揺るがずそこに在り続ける自然への畏怖である。・・・無力な私の目に際立ったもうひとつは、共振する他者の存在である。険しい大地を進む車内を囲うテーブルは、人と人の共振の場だった。異郷の他者である私たちが、その土地を生きる人たちと共に旅をすることで立ち上がる語りには、あの時あの場所でしか生まれ得なかつた迫真性がある。東通村の社会的養育。丘から見物した八戸の津波。変わりゆくものと変わらないもの。異郷の者たちが語らうことで、荒削りだった現実が奥行きを見せていく。こういう出会いの中に、ほんとうに役立つ言葉があるのだろう。そうした言葉を拾い上げてゆくことが旅人の役割であり、証人の役割なのだろう。

下北で経験した強烈な感覚を原口さんは「ダブルバインド」という言葉で語つたが、臨床心理学領域 M1 の大谷通高さんは、「アンビバレンス」という言葉を使つていた。

「今回のフィールドワークで感じた下北半島の印象は、アンビバレンスである。下北を巡る道中は、広大で豊かな自然と、軍事施設を含む科学技術の粋を集めた施設とが入り混じる特異なもので、特に原発関連施設は、その建物ごとのスケールが非常に大きく、下北の自然のなかにドカッと存在感をもって点在していた。道行きの車窓には、木々から空に突き抜けた巨大風車がゆっくりとまわり、豊かな自然と巨大な人工物の

存在感とが日常に溶け込んでいた。こうした下北の風景に身を置いたとき、普段の自分が全く逆の環境に身を置いていることに気づかされる。普段私は、街で暮らしており人工物に囲まれたなかに自然が点在する環境に身を置いている。・・・人それぞれの生きる力はその土地土地に影響を受けて、今日もそれぞれの日常が紡がれている」。



杉浦さんご夫妻に感謝します。

つづく